

月報

<429号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会

二〇一六年五月一日発行

『御言葉のシャワー』

マルコによる福音書 四章一一九節

佐々木 良子

イエスさまは「聞く耳のある者は聞きなさい」と仰せになります。何を聞くのでしょうか。イエスさまが語られる御言葉・主の御言葉のことです。

教会では日曜日ごとの礼拝で御言葉が語られ、そして感謝して喜んで、それぞれの場へと戻っていきます。しかし、御言葉が語られるのは教会だけではなく、いつでもどこにおいても、お一人一人に語られています。私たちはそれぞれの生活の場でイエスさまの御言葉を聞きしよと、とれほど耳を傾けているでしょうか。

この聖書の箇所では「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。」(三節)と、イエスさまが語られる御言葉を、種蒔きのたとえとして記されています。イエスさまご自身が蒔かれた御言葉の種は、道端・石地・茨、そして良い土地にと、それぞれ四種類の箇所に落ちたとあります。この箇所を読むと大抵、「さて、私はどれにあてはまるだろうか…」と「私」を中心に考えてしまいますが、種蒔きをしておられる主イエスに目を留めたいと思います。

私たちが知っている通常の種蒔きは、先ず土地をしっかりと耕して準備をします。しかしここに記されている当時のイスラエルの種蒔きの方法は、所かまわず種を空中に無造作にパッと投げるようであったと言

われています。ですから、良い土地にも又、そうではない所にも、ありとあらゆる所に蒔かれることになります。

イエスさまの語られる御言葉もイスラエル方式の種蒔きのようで、こちらの準備が何も整わなくても、所かまわず全ての地に蒔いてくださっています。大切なことは私たちの状態に拘わらず、常に御言葉は上からシャワーのように蒔かれているということです。

私たちを愛してやまないイエスさまの憐みです。イエスさまの御下にさえ常に身を寄せていけば、必ず御言葉が蒔かれていて、三〇、六〇、一〇〇倍の実を結びようにしてくださる神の恵みが備えられています。

私はこちらに着任前に日本で時間を絞り出してドイツ語の学びに通いました。予習、復習する時間もなかなか時間に行きだけでしたが、やらないよりはまじだろう、という思いからでした。ですからドイツ語を使うのはその限られたほんの僅かな時間だけでした。

そしてこちらに赴任した今、本格的に語学学校に通い始めました。日本とドイツでの学びは比べものにならないほど吸収力が違います。切羽詰まっているということもありますが、大きな違いは、常にドイツ語が耳に入ってくる環境に置かれている、ということだと思います。毎日、毎日、寸分惜しみます努力をして積み上げていくという作業ではなく、毎日ドイツ語のシャワーを浴びていると、ドイツ語の回路が頭の中に自然と作られていくということを見ました。レッスンの時だけドイツ語を聞いていた日本と、現在のように「どっぴりとドイツ語の中に浸かっている」という違いです。

主イエスの御言葉を聞くということも同じことがいえます。いつもイエスさまの御下に身を置かせて頂いているなら、「この私に語りかけてくださる御言葉」を自然とキャッチする頭の回路が出来てきます。半面、

たまに聞こうとしてもなかなか聞き取る耳の回路が繋がらないのです。更に一度キャッチしたらそれで良いわけではありません。毎日蒔かれている御言葉は違いますから、毎日受け取り直すことが大切です。エジプトの奴隷であったイスラエルの民を導いたモーセは大きな間違いを犯しました。エジプト脱出の時にイスラエルの民は「水がない」と不平を繰り返します。主なる神はモーセに一度目は「岩を打て」と仰せになりました(出エジプト一七章)。しかし、二度目は「水を出せと命じるように」(民数記二〇章)と、仰せになるのです。水がない状況は同じでも御言葉は違いました。しかし、モーセは二度目も最初と同じ方法で岩を打ってしまったのです。このことは私たちの日々の生活でも同じことが言えます。かつてお聞きした御言葉と、今日お聞きしなくてはならない御言葉は違つのです。

語られる御言葉は私たちの人生の道案内であって、闇の中にいる人々の光として助け教え導いてくださっています。しかも私たち側に準備がなくても、私たちが生かす勇氣と喜びのイエスさまのお言葉が永遠に蒔かれ続けられているのです。しかし、御言葉を聞いただけでは聞いたことにはなりませんし、何も変わることはありません。御言葉を聞くということとは、信じて踏み出すという行為が伴って初めて聞いたこととなります。そして信じて従っていった結果、実りを見せてくださいます。私たちが何をやるわけでもなく、特別な資質をもっていてもありません。いつもイエスさまの御下に身を寄せながら幸いなる御言葉のシャワーを浴びるだけです。ただ救い主イエス・キリストのそばに座っている一介の罪びとの私たちに御言葉が蒔かれている幸いです。

(二〇一六年四月二四日・主日礼拝説教)

はじめましてー私の過去・現在・未来

佐々木 良子

四月より日本基督教団の派遣宣教師として、ケルン・ボン日本語キリスト教会に遣わされました佐々木良子と申します。これからキリストの恵みによって豊かなお交わりをよろしくお願いいたします。

私は現在このように牧師として歩ませて頂いていますが、誰一人想像できない事でした。私自身も我がことながら、未だに信じられないように思う時もあります。しかし、確信をもっていえることは、憐れみと恵みに満ち溢れておられる主なる神さまが、このような私にも生きて、働き続けてくださっているということだと思います。そのことを皆さまにお証しするために、牧師の道を歩ませて頂いております。神さまについて何の知識もなく、又、どのような環境に置かれようとも、主なる神さまは全ての人に光を与え、希望を与え、生きる力を与えてくださるお方です。このことをお証しするために私は牧師として召された、この一点の働きのために牧師として立たせて頂いている、といっても過言ではないと思います。

私がまだ神様を知らないうちから、私の醜い心の闇をも全てご存知の上で、愛し守り導いてくださっている、ということを経験させて頂きました。神様を求めるならば、既に天の窓が開かれており、かつて経験したことがない、新しい恵みの世界へ招かれていることを知るようになります。「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」(ルカによる福音書一章一〇節)との御言葉は真実!という経験をさせて頂きました。そして、今もその歩みは進行中です。

1. 献身の出来事

私はクリスチャンホームに育ったわけでもなく、神を知らない世界にとっぴりと浸かっていました。好きな音楽の道を歩み国立音楽大学を卒業した後、二四歳で結婚し幸せな家庭を築き、二人の子どもたちにも恵まれ、思い通りの人生を歩んでいました。今までの私の人生を省みますと、私の辞書には恥かしながら「感謝」という言葉はなく、私のために地球は動いているかのように思う傲慢な者でした。

しかし、三五歳の時に神様は人生最大の試練お与えになりました。子どもたちを事故で亡くし奈落の底に突き落とされたのです。現実を受け止める事ができず毎日が地獄のような日々でした。そのころ私は仏も神も信じていませんでしたが、もし、この世に存在するなら「仏も神もあるものか!」とさえ、この世の中を呪いました。どうしようもない思いを、どこかにぶつけるしかありませんでした。身体は生きてはいけるもの、まるで生きてみえませんでした。

2. イエスさまとの出会い

そのような状況の中で、牧師である叔父を通して教会に導かれ、イエスさまと出会いました。叔父が牧師でなかったら、おそらく教会に行くこともなかったと思います。既に両親は亡くなり、夫とも離婚をしてまるっきり独り身となった私を叔父は見ておられず、自分が遣わされている教会に私を招き二年間共に暮らすこととなりました。礼拝に出ることを強制はしませんでした。私は居候の身で日曜日、一人好き勝手なことをするわけにもいかず、叔父たちへの恩返しの一つもりて教会に通うようになりました。しかし、そのような不信仰の私ですら神さまはお見捨てにはなさらず、御言葉を与えてくださいました。その時初めて「もう一度、生きてみよう」と心から思えるようになりました。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてください。」(コリントの信徒への手紙一〇章一三節) 聖書の御言葉も神さまのことも何も分からない者でしたが、この御言葉が私に生きる力、希望を与えてくださいました。主なる神さまの一言の御言葉が一人の人間の命をつなげ、懸命に生きようという心を与えてくださったのです。

3. 洗礼から献身へ

そうして、私のように生きる道を閉ざされた人々に「聖書を伝えたい」「あなたも生きることができ、道は神様が開いてくださる。」ということを示していきたいという思いが与えられて洗礼を受け、同時に献身の思いが与えられ、一九九九年日本基督教団認可神学校・東京聖書学校入学しました。

悩み多いこの世の中で、弱く傷ついている人々がどれ程おられるでしょうか。そのような私たちを守り導くことができるのは、友人でも家族でもなくイエスさまの愛だけです。

実際は良く分からずに洗礼を受け、勢いで神学校に入ったようなものでした。何とも無謀としか言えないような歩みでしたが、唯々、主なる神さまのお力とお支えにより二〇〇三年に日本基督教団小松川教会の伝道師として就任し、二〇〇五年に按手を受けて副牧師に、二〇〇八年から今年の二〇一六年三月まで主任牧師として仕えて参りました。何もわからないような者を教会の方々は見守り育ててくださいました。多くの失敗もしてきましたが、黙って尻ぬぐいをして祈り支えてくださいました。

我が家のような教会でしたが、新たな召命が与えられて三月末をもって辞任いたしました。今は小松川教会が中心となって「佐々木良子宣教師を支える会」を作って頂き、多くの方々が日本の地で共にこの宣教の業を担ってくださっております。日本での応援が私を初め、ケルン・ボン日本語キリスト教会の皆さまのお力となっております。日本でのお祈りとお献げものをもって支えられていることに感謝しつつ、皆さまの熱い思いにお応えしたいと願っている毎日です。第二主日礼拝の後に支えてくださっている方々のために五分間祈禱会を設けました。日本とドイツと心併せて宣教の業に励んで参ります。

4. 更に新たなスタートへ

語学も口々にできない者がこのように宣教師としてドイツの地までやって来るとは、神様のご計画はいかなるものでしょうか。この先、「どうなるのだろうか」という思いよりも「どのようにしてくださるのだろうか」と、大いに期待しております。私には知識も力も経験もありませんが、全知全能の神はイエス・キリストを復活させられたお方です。水をぶどう酒にえられたお方です。このお方に期待することが最大の力だと確信しております。私は相変わらず罪深く弱いままでありますが、これからも神の光の中で、私たちを慈しんでくださるイエスさまの愛によって歩んで参りたいと願っていますので、教会のために、そしてこの者のために祈り頂けると幸いです。

恵みと試練の帰国後一二年

松原 弘信

私は二度にわたりケルン大学に留学した折にケルン・ボン日本語キリスト教会の主にある兄弟姉妹の皆

さんと礼拝を共にする恵みに与りました。二度目は妻と一緒に二〇〇二年三月中旬から二〇〇三年一月初旬までの一〇ヶ月間で、その帰国後、はやく一二年が経過しました。そこで、「恵みと試練の帰国後一二年」と題してその一二年間を振り返ります。

帰国後わずか三月足らずの二〇〇三年四月から、勤務先の熊本大学は他の国立大学と同様に独立行政法人化し国立大学法人熊本大学となるとともに、法律家(法曹)養成の専門職大学院である法科大学院が全国的にスタートし熊本大学でも大学院法曹養成研究科が設置され、私はその教授となりました。その直前に妻は交通事故により長い闘病生活をしていた父(テノール歌手板橋勝)を失い、同年八月初旬に私は突然の交通事故で姉を失いました。私どもが親となったのは、その約二年後、今から約一〇年前の二〇〇五年二月一日でした。既に五二歳となり父親になるのは無理と半ば諦めかけていた私にとって、息子の誕生は望外の喜びであり恵みの瞬間でした。息子誕生の丁度一週間後、妻と息子が退院し、一緒に自宅マンションに帰ったところ、私が所属する民事訴訟法学会の理事の先生から思いがけず民事訴訟雑誌(学会誌)への執筆依頼があり、直ちに引き受けました。既に五〇歳を超えた法科大学院教授として、教育や大学行政の面で大きな責任を背負っていましたが、これからは生まれてきた子供のために研究や子育ても頑張るぞと固く決意したことを思い出します。しかし、五二歳の父親と四〇歳の母親だけによる子育ては大変厳しく、息子誕生のわずか二ヶ月半後の二月末日には、その直前から世話になっていた妻の母の全面的な力を借りるべく、妻の母の居住するマンションを新たに購入し引っ越しました。

息子は、親の欲目かもしれませんが、生まれたときから眼が大きく色白の美形であり、現在のように髪を長く伸ばす前から女の子によく間違われました。他方、

両親が高齢の一人っ子で自然甘やかされて育ったせいか、好き嫌いが激しく嫌いなものは断固言うことをきかない頑固な性格で、親を大いに悩ました。「喜びを弘める」人になってほしいという願いを込めて(私の弘の一字をとって)弘喜という名前をつけたのですが、なかなか親の思うようにはいかず、子育ては試練の連続でした。それでも、息子の存在は私にとって大きな生きがいになり、忙しいなか却って子供のいない時よりはるかに研究を行い、この一〇年に三年間分の文科省の科学研究費を二回採ることもできました。

教会生活は、私が車を運転できず教会が近くでないこともあり、息子が幼い頃はあまり連れて行けませんでした。幼稚園に入った頃から何度か連れていき、小学校一・二年の頃には洗礼を受けたいという明確な意思を親に表明していました。ただ、幼稚園も小学校も結構不登校で、一人家で本を読んだり遊んだりすることが多く、すぐに洗礼を受けさせることにためらいを覚えました。しかも、その頃から私の所属する法科大学院は試練の季節を迎え、地方の国立大学を中心に入口(法科大学院への入学者数)・出口(卒業後の司法試験合格者数)の基準を満たさない法科大学院に対する文部科学省(その後財務省・自民党等)の学生募集停止への圧力が強まり、学生募集停止を表明する法科大学院が相次ぎました。

そうしたなか、約二年前に熊本大学法科大学院の副研究科長になった私は、法科大学院の存続に向け研究科長と一緒に熊大長や文科省との交渉に臨みましたが、力尽き熊大法科大学院は昨年三月に平成二八年度学生募集停止を表明することになりました。他方昨年四月になると、息子はいい担任の先生に恵まれ、友達も多くでき、生き生きと学校に行くよう

になりました。それで満一〇歳になったのを機に本人の意思を尊重し洗礼を受けさせてもよいと思うようになり、今年のイースターに息子が洗礼を受けることになった次第です。

息子のイースター受洗の恵みもつかの間、四月一日付で私が熊大法科大学院の研究科長となってから間もなく、今度は「平成二八年熊本地震」という試練に襲われました。最初の地震はそれほどもなく、「これ家が津波状態で片付いていなくても地震を言い訳にできるね」などと家族で冗談を言い合っていました。ところが、次の本地震により一時的に停電したうえ、水道やガスが止まり、これにより不自由な暮らしを余儀なくされ、電気と水道とガスのある生活の有難みを改めて思い知らされることになりました。

前回のドイツ留学を終えケルン・ボン教会を離れ帰国した後の一二年間を振り返って改めて思うのは、「神様は恵みのなかに試練を、そして試練のなかに恵みを用意してくださる」ということです。そして、私も夫婦にとって最大の恵みと試練が息子の誕生と子育てでした。今後主にある恵みの下に子育て等の試練を乗り越え感謝と喜びをもって残りの人生を全うしたいと願うばかりです。

◇ 訂正 ◇

前号の戸塚辰永さんの本の紹介の記事で、四頁目(著者紹介)内容に間違いがありました。訂正いたします。

(誤)一九九四年、一年間ブレイメン大学留学。修士論文(明治大学)『ナチ時代に於ける

視覚障害者』の準備のため。

(正)一九九四年、一年間ブレイメン大学留学。修士論文(千葉大学大学院)『ナチ時代に

於ける視覚障害者』の準備のため。

◇ 報告 ◇

佐々木良子牧師は三月二十九日に無事来独され、四月三日の礼拝より、当教会牧師として説教奉仕を始められました。ドイツの地で良き宣教の業が守られ、教会員一同と共に教会生活が豊かな実りあるものとなりま



すように祈っています。

佐々木牧師の活動を日本から支援する「佐々木良子宣教師を支える会」のホームページ (<http://yokosaki-missionary.com>) やフェイスブック (<https://www.facebook.com/yokosakasakimissionary/>) では佐々木牧師のドイツでの活動・生活の様子を見ることができ



ます。どうぞ御覧下さい。

佐々木牧師就任式ご案内 六月二六日(日)一四時よりマルクス・シエーファー牧師(フリンラント州教会)とルツ・ヴェラー牧師(日本基督教団)の司式で主日礼拝の中で執り行われます。多くの方々にご臨席いただきたく、ご案内申し上げます。

◇ 予告 ◇

これまでお休みしていたメーアブッシュ家庭集会・聖書を学ぶ会が再開します。どうぞお越し下さい。詳細は牧師(0151-29106278)までお気軽にお問い合わせ下さい。また五月第二日曜日の礼拝後、熊本の地震災害の被災者の方々のため、日本で当教会を支えて下さっている方々のために祈禱会を行います。

5月以降の主な礼拝・集会の予定

- 五月 八日(日) 母の日礼拝 礼拝後 祈禱会
- 五月一七日(火) メーアブッシュ家庭集会 一五時より(藤井兄妹宅)
- 五月一五日(日) ペンテコステ日独語礼拝

五月一八日(水) 聖書を学ぶ会 一九時より(牧師宅)

五月一九日(木) ケルン家庭集会 二時より(シユミット姉宅)

六月二二日(日) 野外礼拝 一時より ヒロシマ・ナガサキ公園にて

※ 子供を中心にした礼拝を計画中。礼拝後食事を囲みピクニックを楽しみます。

六月二六日(日) 佐々木牧師就任式礼拝 七月 三日(日) Strassenfest (教会通りのお祭り)

※ ポンヘッファー教会との合同礼拝後、礼拝堂前に日本食コーナーを出店して、お祭りに参加します。

【夏休み中の礼拝場所の変更のお知らせ】

現在礼拝場所となっているディートリッヒ・ボンヘッファー教会の改修工事のため、七月一〇日〜九月一日の間、下記の教会にて礼拝を行います。礼拝時間は通常通り一四時からです。

Paul-Gerhardt-Kirche

Gleueler Str.106 (Ecke Lindenthalgürtel), 50931 Köln

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde Köln-Bonn e.V.

<主日公同礼拝>
 会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
 住所: An der Decksteiner Mühle 1
 50935 Köln (Lindenthal), Germany
 電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
 時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Fr. Pfr. Ryoko SASAKI)
 牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
 固定電話: 02234-9298792
 携帯電話: 0151-2910 6278
 Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>
<http://koelnbonn.jp>

<振込口座>
 IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
 BIC: PBNKDEFF